

復員

# 復員列車

(1949. 9. 2)



MEMO, mitsunashi

七月二日午が二時一分後には列車を返して

6

X

(七月二日)  
午の二時

街灯の光りもとこーもりか  
よあけ

寝しつゝあつそ 寝まけの町に

遠く汽笛の音もあつらく

煙白朧之なげありのそとの苗の

白の葉も喜もみせ

あつぽうつなアノヤヤア

あつとヤカもしとあよあつあつと  
あつとあつとあつと夜の電もあつと

見つゝ並木もあつとあつと

街灯の光もあつとあつとあつと

しやめんを待つてあつとあつと脚

あつとあつとあつとあつと

平和記念指標のたつた塔の扇型の

あつとあつとあつとあつと

首に手拭をまいたあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつと

ある街でライトを照らし市電レールのエリをやるいよ半裸の人々  
女子青羊團の娘らの湯茶を捧げ続らんゆく

日の丸の小旗をもつを陣組の人々  
赤旗をふしきつた労働組合の各群

芸座堂の旗が平かホーリの波形屋根  
色つかえさうか、赤い腕章、白い腕章

権威並に隊列、ふらふらと炎照

線路の周の何方に想く赤紫、芸者の信子灯

洗車の同、古きる白みとウチ  
たげこの煙、労働者の顔、衣服

配の便所の、ベンチにも寝るルキンたち

ミタ伍々、互にゆめをたれあふん傍聴すよ

面影、夜うせなす

フラットホーリの夜の埃  
じかに四逆めれんヤカンの列

刻々のつかぬ美には、手、朝迄の朝鮮の歌

到着十分前、遂に全体的うターと致いのをす

皆直ら面目な善情

花の輪の眼、嬉しい眼

お水にホーリを埋めらん人々の昂奮は感染す

歌の中をぬる今日調が再降在るわ、あるとわ  
噂かつたわる

一段と云まるの頃、互に腕と互んで

走りこむヘッドライト、列車到着停止

舞臺

降り来る兵隊服、荷物を下ろす後退者

周囲の歓声の中を、緊張した固い顔、兵隊靴の

止かくき、靴を混る——（宗徳と投す眼——）

指印を押すように、整理員の指導す——

日の丸の旗、振り手を志して、宗徳、に——

身とのりあ—— 飛び出す眼——

その背仰む  
爪をさす

窓のうりあはん、後退者たち、忽ちフラットに

と心あ—— 叩きはしめす、  
跳開物、赤い顔、

よく肥えた

宗徳者のスクラムと、  
（後退者） 後のスクラムと向合せん

り—— 交互互に手をゆすする向、  
熱狂的なる

インターの合図、  
宗徳者の声に

まきれらく、  
指のうの、  
宗徳は膝の底から大きい

叫ぶかう、  
宗徳のときれいに出、  
逆側からの

拍手、  
そ—— 指のうのときか、  
つこくは握手、

アウシユ——、  
せし、  
娘もわめてし、

いちちもぞつこい、  
同じ顔、  
同志、  
といふ

気が付か

遠い路をたのう踊り出すほど

足はつゆれうの、愛しとら、空ん其部とあらみふり

拍手と歓声と、歌と強と、耳にはをよせ

こころやううーと叫ぶ声と

振りしめ、冷く汗はみ、思くつや、かた

歌は九々として眼は燃えこ

歌は九々として眼は燃えこ

歌は九々として眼は燃えこ

無味で、行く時と違える一人、か何と堂々とし

いよこしと

アゴヒモかやなまよい、吹るいよアゴの表情

窓のう見え、列車の中

剛よく白い光り、巨大な毛布のじみ、リエツクはさ

その棚のつゆれさうち荷物、固んはさめあ

贈る小なうしい美しい花束、塗りうけりる

汗をいませ、眠るいよあやもいよ

走り、担子、駅員、汽笛のうらや

窓の、昇降口の、群れをふる走り、あうはなてぬ握手

うらや合小顔々

連度ー、下才の山嵐、(吾度愛下)

最は尾うテツキから振るうらま

最は尾うテツキから振るうらま

最は尾うテツキから振るうらま

降りた階の者なり

フロアの水のみ揚へ上つて演説するニ三人

団むつり者ニポー言者のやじ

湯着く堤・電灯に

電氣時計のぶら下る芝盤

旗の群の騒動・破れをドラカーに

もみ合の (ワウレコイ)

一才を殺す

お互山日本人と云ふのかこら討つ合の言葉

(民族の意識の潜在的の印場)

暗い配前の店場・灰白の柵・ハスの紫灯

(園では赤旗は思ひ)

後者者たるの自然の演説・團不適合議人群

かゆさ小上秩序・まかうとすゝ意志・整然!

かすれを声でライターの光りかすてらぬきれきり

後み上上と後々ニ4名の要求宣言・かすれ

一言く 応へる群衆 (申し返る宗強)

赤旗にかすみかすり丸の旗

即時に入電宣言——差上る拳 (赤旗) 大なる流星

打ちのフラッシュ

大なる奇跡を指さるまへ

静かな蒼白の園の広場の隅、

一人の傍を歩く。 幼少時は地味芝居を演じていた

青年が、ソ聯の生活に語り、社会制を

語り、婦人の地位に語り。

そして直ぐに目圓の女をへり、御手かきを

~~時々~~時々眼をうるはしき即気な顔

自然な身振り

ソ聯のよきと語り、時の達人、攀りさうな

みづん、即ちな、眼の表情

「若さへは信じておいてせう」といふ言葉の

断固とした深いこゝろ (眼をぬくわりの)

日本と建つて通すための眼をまるといふ

旅路、とうとうとわづらひたるこゝろ、くわぬかと嘆く

ほど、紐づけ個人のためなるこゝろ、建設的な

決意の火をこゝろ

浮城の街、電車の道の上、空に坐りこんで

こゝろ、わづらひたる、人民大会、子供を抱きかか

れをきいて、民衆の討論にまな、苦慮す。

うんと、度々のめらん、灯、ちりく、

旧年中、傍る者、さへ、おのむし、

ぬかよみ、（見座）、（生活の花）